

## 留学生への作文指導

神 吉 隆 子

### 1. はじめに

筆者は、平成9年度から本学の社会学部・経済学部・経営学部の日本語1B（外国人必修）を担当している。日本の大学生活で外国人留学生は、「講義を聴くこと」「文献を読むこと」「ゼミで発表すること」<sup>1)</sup>「レポートを書くこと」という言語の四技能のすべてを必要としている。しかしながら、多くの授業で単位を取得するために課されているのは、講義概要を見ればわかるように、定期試験・レポートである。つまり、四技能の中でも、留学生が最も必要とする能力は「書くこと」<sup>2)</sup>であろう。

そして本学に入学してくる外国人留学生の多くは、母国で高校を卒業し、来日して日本語学校で1年半から2年間、日本語を学習している。中級を終了した段階で、大学に入学する学生が多い。その段階から、成績評価に耐え得るレポートを作成するには、学習すべき事項がまだまだ多くある。

これらの学生のニーズと現状を考え、筆者の授業は、日本の大学生活に必要な作文能力の向上を目標として行っている。

指導方法の特徴としては、第1に学習者の文法・語彙・表現などの誤用をクラス全体で考え、学習者参加型の授業<sup>3)</sup>を目指したこと、第2に学習者の主張が読み手に伝わる作文を書かせることを目標としたこと、である。

本稿では、外国人留学生がレポートを作成する能力の習得を目標とした授業の実践報告を行うと共に、実際に教材とした学習者の作文を原文のまま提示する。

### 2. クラスの概要と学習者

平成11年度の学習者<sup>4)</sup>（単位を取得した学生）の国別内訳は、韓国9名、中国5名、台

湾2名、フィリピン・ベトナム・マレーシア各1名で、合計19名である。そのうち、再履修者は3名である。

本学では課していないが、多くの大学が受験資格としている日本語能力試験1級合格者(400点満点で280点以上の者)は、5名であった。他方、100点代の学習者も数名いた。

学習者の年齢は40代1名、30代2名、20代15名、10代1名である。

授業回数は、前期授業が11回、後期授業が9回、定期試験が2回であった<sup>5)</sup>。

### 3. 授業の方針と内容

書くことの指導の内容には、①平仮名・片仮名・漢字を用い、表記法に従って正しく書ける(文字・表記の指導) ②適切な語彙や表現を用い、文法的に正しく書ける(語彙・文法の指導) ③適切な内容と構成により、表現意図を正しく伝える文章が書ける(内容づくり・文章構成・推敲などの作文技能の指導)がある、とされている<sup>6)</sup>。

確かに、一文一文を正しく書くことの積み重ねが、まとまった文章を書くことにつながる。しかし、①②が完璧になるのは一朝一夕のことではない。まして、1回90分・20回程度の授業回数、25名程度の授業登録者がいる授業では、1年間でその目的を達するのは至難の業である。

他方、①②は、作文を書く上での基礎能力であるが、それは③を目標とする指導の中で、行うことが可能であろう。

そこで、日本語1Bの1年間の授業の目標は、学生のニーズを考え、「レポートを作成する能力を習得する」ことにした。そうすると、作文の指導の内容は自ずと上記の③になる。

次に、具体的な内容に移ろう。授業は、基本的には教科書・テキストを使用せずに、学習者が宿題として授業外で書いた小作文(400~600字)をもとに、進める。学習者自身が書いた作文を氏名は伏して提示し、クラス全体でどこを、どう訂正したらいいかを考える。ほとんどの場合、前週でポイントとなる学習項目は学んである。学習者自身が書いた作文で、学習項目が定着したかどうかを確認する。

この方法は平成7年度の本学の日本語専修講座(補講)から行っている。自分やクラスの誰かが書いた例文を学習者は身近なものとして受け止め、間違いを自分のこととして考えるようだ。

しかし、クラス全体で考えるといっても、間違いを指摘するのは日本語能力の高い一部の学習者に偏る傾向がある。そのため、課題文を前週に宿題としたり、授業時間中に考える時間を取った後で、指名して訂正させるようにもした。また、3回に1回程度は、個人作業をさせ、教師のチェックを受けてから先に進む方法も取った。学習者全員が課

題に取り組み、教師が学習者の進捗を確認しながら授業を進めるためである。

取り上げる例文は、訂正がほとんどないものと、あり過ぎて取り上げると混乱するものを避ける。

学習者が提出した作文については、翌週、添削して返却する。指定字数に満たないもの、訂正箇所が多いものは再提出させる。クラスの規模が小さい時は、添削者が理解できない箇所を個別に学習者に尋ねて指導することができる。しかしながら、20名を超えるクラス規模では作文用紙を通しての確認しかできず、直接言葉を交わして確認・指導することはできなかった<sup>7)</sup>。

次に、平成11年度の授業の概要を示す。

前期(1) 自己紹介文・自分に関することについての作文

(2) 手紙文

(3) 要約文

後期(4) アウトラインを作成しての作文

(5) (アウトライン作成後) 統計・資料を用いての作文

(6) (アウトライン作成後) 意見文

上記の6項目をそれぞれ2～4回の授業で学習する。

以下で、各項目について説明し、教材とした学習者の作文を提示する。

### (1) 自己紹介文・自分に関することについての作文

最初の授業では、自己紹介の文を書かせる。

これは、教師が学生のバックグラウンドを知るためでもあり、また誰もが書く材料もっていて、書きやすいテーマだと考えられるからである。

2回目では、学習者自身に深く関わるテーマを課題として出す。平成11年度は「私の趣味」をテーマとした。これも、自己紹介文と同様、誰もが書く材料もっていて、書きやすいと予想されるからである。

まず最初の段階では、毎週600字を日本語で書くことに慣れてもらいたいと考えている。そして、この段階で、原稿用紙の使い方、レポートで使う文体、使ってはいけない終助詞・縮約形・話し言葉の表現などを学習する。

### (2) 手紙文

大学で単位を取得するために、一人でレポートを書く力をつけることが、この授業の最終的な目標であるが、大学生活で必要とされる日本語で書く場面はレポートだけではない。学習者たちは、大学生として、日本で生活していく中で、様々な日本人と関わっていくだろう。同年齢の人には電話で済ますことも、年上の人や面識のない人には手紙を書く、という状況も予測される。そして、手紙には待遇表現が多く用いられるが、筆

者が担当していたクラスは、本学を卒業して観光業に携わる学生が多いので、待遇表現も学習しておく必要がある。

さらに、ここで手紙文を扱うのには、(1)の自己紹介文の段階から引き続いて、文章を書くことに慣れる意味もある。

しかしながら、手紙はレポートの文体と異なり、丁寧体（～です・～ます体）で書かれる。(1)の段階では文体をどちらかに統一させることを学ぶ。通常、自己紹介文や自分に関わる文は、会話の延長とみなされ、丁寧体で書かれることが多い。そのため、手紙文までは丁寧体で書き、要約文以降、普通体（～だ・～である体）で書くように指導している。

また、縦書きで原稿用紙を使うのも、この手紙文だけである。それ以外は横書きである。

テーマは、近況報告「母国の恩師に日本の大学に入学したことを知らせる手紙」、礼状「旅先で自宅に招いてくれた日本人への礼状」、詫び状「母国の知人から、日本人に陶器のお土産を渡すように頼まれたが、途中で割ってしまったことを詫びる」、面会の依頼状「大学の先輩に、会社の概要などを質問したいため、面会を依頼する」（前期試験）である。

### (3) 要約文

大学のゼミや講義では、一章ずつ割り当てられて、発表したり、一冊の本についてまとめることを求められることが多い。

ここでは、新聞の600字程度のコラムを、まずは段落ごとに短文でまとめ、それから三分の1の200字、100字、一文（一文で要約することは後期の授業で取り上げるアウトラインの主題を考えることにつながる）に要約する作業を行う。段落ごとにはとらえられても、要約となると、筆者の言いたいことが抜けていたり、全体のバランスが悪かったりすることがある<sup>8)</sup>。

また、字数が少なくなればなるほど、日本語で短く表現するテクニックが必要となる。

要約文の最後の宿題では、1400字程度の社説を取り上げ、300字、100字、一文と要約させたが、内容が難しすぎた。辞書を引きやすくするために、漢字の読みは付けていたが、内容を読み取ること自体に時間がかかり、1週間の宿題としては学生の負担になったようだ。

平成11年度は、茨城新聞・いばらき春秋（平成11年6月3日）、朝日新聞・窓「トキ誕生」（平成11年5月24日）、同「朝鮮学校」（平成11年6月17日）、朝日新聞・社説「指導要領を問い直せ 日の丸・君が代」（平成11年6月26日）、読売新聞・編集手帳（平成11年7月5日、前期試験）を教材として、選んだ。

いずれも、日本で起こっている最新の出来事を取り上げた<sup>9)</sup>。

#### (4) アウトラインを作成しての作文

要約の作業を通して、既に書かれてある文章——その文章は、新聞の論説委員・コラムニストという論理的な文章を書くことを職業としている人々によって書かれたもの——を段落毎にまとめることは学んだ。各段落が、序論・本論・結論のどこに該当するかも考えた。

ここからは、学習者が文章をゼロから作り出す。その際、全体の構成を先に考え、序論・本論・結論で何を言いたいのかを明確にさせておく。文法的には多くの誤りがある外国人留学生の文章でも、論旨が一貫していれば、レポートを読んで採点する専任教官が内容を理解しやすくなるだろうと考えるからである。

アウトラインを学習する前に、学習者に作文を書いてもらう。母国での教育でも、序論・本論・結論という構成は、学習済みであるはずだ<sup>10)</sup>。しかし、思い付くままに書き、構成がないような文章も多いのである。アウトライン学習後に同じテーマで書かしてみると、アウトラインを作成するかしないかで、文章が違ってくる。その違いを、学習者に認識させることができる。

アウトラインについては『大学生の日本語』<sup>11)</sup>を教材にした。アウトラインでは、主題だけは文の形（主語と述語がある）にし、それ以外の序論・本論・結論は、テーマなどの形で名詞止めでもよいとした。主題文と結論は内容が重なり合うことが多いが、結論は序論・本論を前提としているのに対して（つまり、序論・本論ですでに述べてあることは言及する必要がない）、主題文は一つの文で、文章全体の言いたいことをまとめたものである。

アウトライン作成を学習した初歩の段階では、アウトラインと本文の内容が一致していない例も多々あった。

ここで扱うテーマは、何もないところから、ある程度まとまったことを述べるため、外国人留学生が書きやすいと考えられるものにする。平成11年度は「日本とあなたの国」「留学生と日本人学生」であった。

#### (5) (アウトライン作成後) 統計・資料を用いての作文

レポートを書くときには、統計・データなど客観的裏付けとなる資料を用いたり、書籍・論文から引用したりすることによって、自らの主張を正当化することが多い。そのため、ここでは、統計・資料を使う時の表現、引用の仕方を学習し、それらを使用して作文を書くことを目標とする。

まず、実際にどのような表現が使われているのかを、新聞記事の中から取り出す作業を行う（「子ども虐待 相談6900件」朝日新聞 記事 平成11年11月1日）。

次に、学習者が自分で新聞記事を選び、用いられている表現を抜き出し、短文を作る。また、接続の表現、段落と段落の関係を考えることも学習した（「天皇の素顔」朝日新

聞 夕刊 窓 平成11年11月15日)。

さらに、書籍・雑誌からの引用の仕方も学ぶ。

それから、(4)のアウトラインで用いた同じテーマについて、統計・資料を学習者が探し出し、それらの統計・資料を利用して再度作文させる。これは、学習者の負担を軽減させるためである。また同じテーマでも、数字的な裏付けや書籍・論文からの裏打ちがあることで、レポートの文章が深まり、大学生活で要求されるレポートに近づいていくことを学習者に認識させることを狙っている。

日本・韓国ほかアジア5カ国とアメリカでの世論調査(朝日新聞、平成11年10月24日)と本学の『第7回学生生活実態調査報告書』(平成10年10月調査実施)の中のデータを使って、作文をさせた。

そして、この段階の最後では、学習者が自らテーマを選び、アウトライン文を添付し、統計・資料を用いて作文を書く。

#### (6) (アウトライン作成後) 意見文

レポートでは、問題を提起したテーマについて、統計・資料によって確認したり、先行文献に当たったりして検討した後で、最終的な結論、自らの主張を述べる必要がある。そこで、ここでは意見を述べる表現を学ぶ。

それらの表現は、『実践 にほんごの作文』<sup>12)</sup>を教材として学習した。さらに(5)と同様に、実際にどのような表現が用いられているかを新聞記事(「幼児の受験が影を落とす悲劇」読売新聞 社説 平成11年11月27日)で当たってみた。

アウトラインを作成し、データを利用して、主張を述べる作文を完成させる。つまり(4)(5)(6)を集大成させることが、この授業の最終的目標であるところの「レポートを作成する能力を習得する」ことに到達することだと考えた。平成10年度はその段階までもっていくことができた。しかしながら、平成11年度は授業回数が足りず、意見文の作文だけで、終了せざるをえなかった。

## 4. 実例

### 4.1 自己紹介文・自分に関することについての作文

原稿用紙の使い方——①改行の際、1マスあけること、②句読点のマスの中での位置、③句読点の打ち方、④アルファベットと数字は1マスに2文字、⑤小さいっ・ゃ等も1マスに1文字、などを学習する。

さらに、文体には丁寧体(～です・ます体)と普通体(～だ・～である体)があり、文章を書く時には最初から最後までどちらかの文体に統一する必要があることを学習する。この授業では要約文以降は後者を用いる。

学習者の書いた文章で上記のことを見てみよう。

文法等にも多くの誤用があるが、ここでは原稿用紙の使い方と文体の統一、使っていない話し言葉の表現ということだけに注目する。実際の授業では、もちろんそれら以外の文法・語彙・表現の誤用にも触れた。

なお、例はいずれも学習者が書いた作文を原文のまま掲載する。

#### 例1 「自己紹介」(作文の一部) [問題点は原稿用紙の①③④と文体の不統一]

韓国の釜山(プサン)というところで1974年10月20日、生まれました。家族関係は両親と姉が一人でみんな4人家族でございます。日本に来る前は韓国の東洋大学で建築を勉強しましたがとてもあまり興味がなくて休学したあと、日本の留学を決心しました。

観光というのは私が昔から興味を持っていた科目分野だったので観光学科を選びました。

#### 例2 「私の趣味」(作文の一部) [問題点は文体の不統一]

私の趣味は、読書です。私は、週何冊の本を読んでいます。小説や物語が一番好きです。

最近の子供達や若者は本を読まなくなった、という声をしばしば聞く。

### 4.2 手紙文

拝啓・敬具、前略・草々という起首・結語、時候のあいさつ、先方の安否を問う、こちらの安否、結びのことは、という手紙文の形式を学習する。

しかし、形式を整えること以上に、学習者が書いた手紙が、状況設定にあった内容になっているかどうかも重要である。

学習者が手紙文で難しい点は、やはり敬語である。丁寧語の接頭辞の「お」と「ご」の誤用、状況にあわせて、尊敬語を用いるのか、謙讓語を用いるのか、文全体をどの敬語のレベルにするのか、など多くの問題点が見受けられる。

実際には縦書きで書かせたが、ここでは横書きに直して示す。

#### 例3 「母国の恩師への近況報告」

拝啓

晩春の季節、だんだん暑くなって来ました。先生もお元気でお仕事をしておると思

います。

私も大学入って4年目になりました。生先のお掛けで毎日忙しいですけども精一杯でやっています。

先生からいろいろとお世話になっておりましてありがとうございます。

ところで先日以前日本語学校のクラスメートと偶然にあいました。皆先生にあいたいと思って先生と一緒に食事でもするかと提案されました。先生ごいそがしいどころ申しわけありません。

先生の都合を知らせてくだされば幸いです。皆さんののしみ先生のご返事を待っております。

敬具

#### 例4 「旅先で自宅に招いてくれた日本人への礼状」

前略

どこまでも新緑の色増す季節となりました。

みなさまもお元気でお過ごしでいらっしゃると思います。

私も旅が終わって日常生活に戻り、勉強に一生懸命にやっています。

そちらではいろいろとお世話になりながら、お礼のお便りが遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。

ところで、先月一人で旅行する時すごく寂しかった。みなさまと出合って再び家庭の和やかな雰囲気を感じました。日本に来て久しぶりにそういう気持ちになりました。別れる時もたくさんお土産をいただき誠にありがとうございました。ほんとうにみなさまと再び合って一緒に東京を觀られたらと思います。私のところにもぜひ遊びに来ていただければ光栄の至りと思います。

みなさまのご健康とご多幸をお祈り致してご都合をお知らせくだされば幸いです。

草々

#### 4.3 要約文

外国人留学生が文章を要約するときの誤りやすい点をあげてみよう。

##### ① 原文を正しく理解しているか。

内容を間違って解釈してしまい、要約の内容が原文の内容と異なってしまうことが多々ある。

##### ② 自分の意見は入れているか。

～と思う、～と考えると文末を結び、自分の意見を入れてしまうことがある。



## ③ 要約した文章だけで、内容を理解できるか。

オリジナルを読まなければ内容がわからないもの、日本語として通じないものが多く、外国人が要約をするときの一番重要なポイントであろう。

## ④ 結論が入っているか。

結論部分は文章の後半に書かれていることが多いが、前半部分から要約を始め、指定された字数におさめるため、結論部分をカットしてしまうことも多い。

実例を見てみよう。

原文「朝鮮学校」(朝日新聞 夕刊 窓 平成11年6月17日)

大阪朝鮮高級学校が全国高校総合体育大会のサッカー予選で優勝し、晴れて大阪府の代表となった。

学校教育法で「高校」と認められない朝鮮学校は、かつては高校総体に出場できなかった。1994年に参加の道が開かれて以来、団体競技で外国人学校が全国大会に進出するのは初めてだ。

選手にとって全国大会出場は、どれだけ励みになることか。在日朝鮮人の人たちにとっても喜びはさぞやと思われる。

しかし、朝鮮学校に学び、教壇に立ったこともある知人は、「非常にうれしいが、複雑な気持ちもある」という。

なぜなら、朝鮮学校が今後も強いサッカーチームを育てられる条件が、どんどん失われつつあるからだ。

朝鮮学校は、日本国籍を取得する人の増加や少子化で児童、生徒が減り、統廃合が進む。

民族教育を中心に独自のカリキュラムを組む「各種学校」のため、同じ税金を払っているのに、一般の学校に比べ補助金にも恵まれない。在日の人々の寄付に頼る運営は苦しい。

「同僚だった教師によると、給料が何カ月も滞ることもあるそうだ」と知人は語る。

それに、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の指導者の偉大さや革命の歴史を強調する教育が、日本永住を考える在日の人々の生活感覚とかけ離れつつあるのも事実のようだ。

東京の朝鮮学校では今春、教育内容を日本の実情に合わせて改めるよう、父母らから要望書が提出された。そうしなければ自ら門戸を狭めることになる、と知人も思うという。

ともあれ、大阪朝鮮高級学校イレブンも相手チームも、試合では互いに全力を尽くしてぶつかってほしい。

その中から、同じスポーツを志す仲間の連帯感が生まれてくるに違いない。

## 要約例1 (200字) [結論がない]

学校教育法で「高校」と認められない朝鮮学校は、かつては高校総体に出場できなかった。日本国籍を取得する人の増加や少子化で児童、生徒が減り、統廃合が進む。民族教育を中心に独自のカリキュラムを組む「各種学校」のため、同じ税金を払っているのに、一般の学校に比べ補助金にも恵まれない。北朝鮮の指導者の偉大さや革命の歴史を強調する教育が、日本永住を考える在日の人々の生活感覚とかけ離れつつあるのも事実。

## 要約例2 (200字) [原文を間違っている箇所がある]

かつて認めない朝鮮学校はサッカー予選で優勝し、晴れて大阪府の代表となった。うれしい同時が、複雑な気持ちもある。朝鮮学校は、日本国籍を取得する人の増加や少子化で、強いサッカーチームを育てられる条件が、失われつつあるからだ。一方で、同じ税金を払っているのに、給料が何ヶ月も滞ることもあるそうだ。それに対して今春、教育内容を日本の実情に合わせて改めるようです。朝鮮学校も相手チームも、仲間の連帯感が生まれてくるに違いない。

## 要約例3 (200字) [原文を間違っている箇所がある]

朝鮮学校というのは日本国籍を取得するため作られた学校である。そういう特殊な学校がサッカー地域予選で優勝して本大会に出張するのは初めてのことだ。しかし、いろいろな問題もある。学生数も減っているし政府からも補助金も恵まれない。それに、朝鮮学校は指導者の偉大な革命や歴史を強調する教育は日本の実情に合わないのだ。ともあれ、試合では互いに全力を尽くして同じスポーツを志す仲間の連帯感が生まれてほしい。

## 4.4 アウトラインを作成しての作文

まず、同じ学習者の作文でアウトライン作成の有無による違いを見てみよう。

## 作文例 アウトライン作成前

「日本と韓国」

韓国と一番近い国といえば日本だ。逆にいえば日本から一番近い国は韓国である。しかし第二次世界大戦後韓国は日本をほど遠く感じるようになった。遠く感じてい

ても文化においても留易においても韓国にとって交流が一番多いのは日本である。

例えば、韓国の憲法は日本の憲法に基づいてつくられたし、政治・経済・医学・技術など西洋の学問のほとんどの言葉は日本を通じて韓国に入ったとしても過言ではないほど欧米の学問は日本の影響をかなり受けている。

日本を通じて入った学問を学んだせい、私が始めて日本に来た時、外国とは思えないほど自分の国と似ている所が多かった。

しかし、それは勘違いであった。

生活しているうちに不思議なことばかりだった。私が一番感じたのが、日本の性文化である。日本の性文化が開放されていたとは聞いていたが、これまでとは思ってもよらなかった。

まず、テレビ放送である。口にだすことさえ恥しい言葉を何気なくつかう芸能人だちには驚いてしまった。また、本屋にずらりと並んでいるセックスの本やマンガ・雑誌などにも私には衝撃であった。

私は日本の性文化がいくら開放的だとはいえ子供でさえ何気なく接しやすい日本の性文化は変える必要があると思う。

#### アウトライン

主題文 よい文化を受け入れよう。

序論 日本はアジアの先進国

本論 乱れている日本の性文化が韓国に潜んでいる。

結論 正しい文化の交流が必要だ。

#### アウトライン作成後

日本はアジアの先進国と言われている。私が日本に留学してるのも、日本が先進国であり、また韓国と一番近くて、交流が多いからである。

昔、韓国は日本に優れた文化を伝えたが、現代には西洋の優秀な自然地理・科学・医学・建築など数え切れないほどの先進技術を韓国が日本から持ち込んでいる。

実際に日本に来て見て、日本の経済力には驚いた。しかし、私がさらに驚いたのは日本の開放的な性文化だ。本屋にずらりと並んでいるエロのマンガや雑誌、それを平気で電車などで読んでいるサラリーマン、また、セックスをやっていることを自慢しているように話す女子高校生たち韓国では常識的に考えられないことを平気でやっている。現代文化をほとんど日本から吸収している韓国である。

すでにビデオテープや本などは密入されている。それはこういう物を求めている消費者がいるからではないか。

日本にはよい文化が沢山あるにもかかわらず、悪い文化ばかり韓国の若者に影響を与えているのだろうか。そこにはお互いの優れた文化を知る機会が少ないのではないかと思う。

日本はもっと正しい日本文化を隣国につたえるべきであり、受け入れ側もよい文化だけを受け入れる必要があるのではないか。

これはクラスでトップレベルの学習者の作文である。この時は2週続けての宿題で、期限内に両方を提出した学習者が少なかった。文単位では訂正する所が少ない作文だが、構成については問題点があったため、教材として取り上げた。

アウトライン作成前は、「日本と韓国」という題名で、日本と韓国の歴史的関係から切り出し、日本の性文化が開放されすぎている現状を論じ、日本の性文化は変える必要があるという結論となっている。その構成を見てみると、序論部分が6段落まで、本論が7段落、結論が8段落に該当する。構成から考えると序論部分が長すぎ、肝心の本論部分が少なすぎる。内容も性文化を論じるのに、日本と韓国の関係の深さについて5段落にわたって述べてしまっている。

アウトライン作成後は、構成面では序論が3段落の途中まで、本論が3段落の途中から5段落まで、結論が6段落となり、段落の配分の点ではやや改善された。ただし、序論と本論が3段落に一緒になっている点を変える必要がある。2段落の終わりに、この文章が性文化について論じることを入れ、3段落から本論にするとバランスがよくなると思う。論理の構成は、本論で性文化について日韓の状況を十分述べ、自らの考えを結論づけていて、以前のものよりよくなった。

主題文は一つの文の形にするように指導したが「よい文化を受け入れよう」だけでは、この文章が何を言おうとしているか、理解できない。書くとすれば、「韓国は日本からさまざまな文化を受け入れてきたが、性文化などよくない文化は入れずに、よい文化を受け入れよう」といった文になるか。

最も重要なことは、学習者の主張が、読み手に伝わるかどうかであるが、アウトライン作成後は、読んだ人が学習者の言いたいことを理解できる文章になったと思われる。

#### 4.5 (アウトライン作成後) 統計・資料を用いての作文

3. 授業の方針と内容で述べたように、この授業では一文一文の正確さよりも、文意を正しく伝える作文を書くことを目標としている。しかし、特定の表現が用いられるこの項目では、学んだ表現を用いて一文を正確に書くことも取り入れた。

統計・資料で用いられる表現を学んだ後で、学習者が作った例文を一部提示しよう。

- ・今日は円高が急激に増えた。
- ・人口のグラフにみると昨年より、増加の一途をたどっている。
- ・市場の物価は徐々に増えていく。
- ・今年地震は前年度比活発になっている。
- ・中国の改革開放で人の生活水準が大幅に提高した。
- ・輸出は前年度の1.5倍余り増加したが、黒字には満たなかった。
- ・今年韓国の大学入試率は前年度の3倍ぐらいむずかしいそうだ。
- ・友達の手紙によると韓国の経済が徐々によくなるようになったと書いている。
- ・人間の寿命は徐々に増える。
- ・子供の平均伸張は若しく増える。
- ・地中海の水位はややのぼる。
- ・経済が高ければ高いほどインフレがのぼる。

このように、主語と述語の組み合わせが不適切なものが多かった。円高・インフレ→進む、物価→高くなる、身長→伸びる、等に訂正する。

次に、学習者が自らテーマを選び、統計・資料を用いて書いた作文を見てみよう。

#### 作文例

##### アウトライン

題 「アルバイト」

主題文 いろいろな種類のバイトをしてみて人生経験を増やそう。

序論 日本はバイトの天国で手軽い仕事から専門的技術を必要とする仕事までいろいろな仕事がある。

バイト情報誌「FROM・E」がバイト事情をアンケートした。

本論 「バイトをする目的は？」の質問で1位が小遣いのためだった。

「バイトを選ぶ条件は？」の質問で1位は勤務時間帯だった。

結論 ひまな時間をつぶすためにするバイトではなくていろいろな種類に手を出して人生経験を増やすのはどうだろうか。

日本はアルバイトの天国だ。コンビニや居酒屋の店員などの手軽い仕事からホームページの作成、パソコンの入力代行などの専門的技術を必要とする仕事までさまざまな仕事がある。アルバイト専門情報誌も何種類もあって自分がやりたい仕事、時間など選べられる。

アルバイト情報誌「FROM・E」が若者のバイト事情を追跡するアンケートを実

施した。「バイトをする目的は?」という質問で1位は普段の小遣いのため、2位は大きな買い物の出費に備えるため、3位は貯金をするためなどの結果が出た。

「アルバイトを選ぶ条件は?」の質問では1位が勤務時間帯、2位が給与、3位が通勤時間だった。学生だから勉強のため勤務時間帯は重要だろう。2位に「給与」を挙げるのは不況のせいだろうか。そのほかには職場の雰囲気、勤務先の知名度、教育・研修制度があった。

バイトの目的で2位が大きな買い物の出費に備えるためは意外でなんと生活費や学費を稼ぐためは6位だった。おやから生活費や学費をもらってバイトは小遣いと買い物のためにするかしら。ほかには視野を広げるため、友達がほしい、ひまな時間をつぶすためなど収入以外の目的も多かった。

ひまな時間をつぶすためにするバイトなんかじゃなくていろいろな種類に手を出して、人生経験を増やしてみてもどうだろうか。

この作文例は、アウトラインと本文の内容が合致している。主題文も理解できる。しかし、本論で述べられているアルバイトの目的と選ぶ条件というデータから、「いろいろな種類のバイトをしてみても人生経験を増やそう」（原文のまま）を導きだすのは論理的であるとはいえない。

この例は学習者の主張が先にあって、統計・資料を利用したものではない。逆に、アルバイトについてのデータが先にあって、それについて論じたものである。統計・資料を使って書きなさいと言うと、多くの学習者が、この例に見られるようにデータを解説・説明する作文を書く。例年、データを利用して、自身の主張するところを書けるのはほんの一部の学習者だけである。

#### 4.6 (アウトライン作成後) 意見文

先に述べたように、平成11年度は授業回数が当初の予定より減ったため、意見文については取り上げた回数も少なかった。また、多くの講義で実際に課せられているレポートに近づけるため、統計・資料、先行文献の引用などを加えた上で、学習者の主張を述べるといふ、この授業の総まとめをすることもできなかった。

ここで、提示する学習者の作文例は意見文の一例である。後期試験での課題「この1年間受けて来た日本語1Bの授業について、あなたの意見を述べなさい。①アウトラインを作成する ②450字以内で作文する」である。

作文例

アウトライン

- 題 日本語1Bの授業が私にあたえた影響
- 主論文 一年間宿題が嫌だったが、それのおかげで日本語がうまくなった。
- 序論 日本語1Bの授業を受けた今、4月より作文がうまくなったと思う。
- 本論 ・毎週作文の宿題でいらいらしたことが多い。  
・留学生に対して日本語授業が一番必要だし、基本的な授業である。
- 結論 宿題が嫌だと思うことが多かったが、今、授業のおかげで日本語がうまくなったと思う。

大学に入学して、1年間、日本語1Bの授業を受けた今、まだ自分の日本語実力をわからないけれど、4月より作文がうまくなったと思う。

初めの授業から、授業が終わるまで、毎週作文の宿題は、そんな量が多いわけではなくても、いつも月曜日の授業まで、宿題の心配で、いらいらしたことも多い。それはもちろん、自分の性格が、何かあれば早くやらない性格のせいだと思う。そして授業は宿題を授業中、皆で、正しく直す時間だから、本当まちがいがやすいこととか、今までわからなかった日本語を外の授業より、もっと勉強になったと思う。我々留学生は、大学に入学したが、まだ、日本語の作文とレポートそして会話で日本人学生とくらべたら子供のような実態だと思う。そんな我々留学生にとって日本語授業は、まず外の授業の勉強に、一番必要な授業だし、大学生の留学生の基本的な授業である。

1年間宿題が嫌だと思うことが多かった今、私の日本語は宿題と日本語授業のおかげでもっとうまくなったと思う。

この学習者の1年間の評価はクラスの中位であった。韓国人学習者に多く見られる濁点の有無の違い、接続表現の違いなど、文法上訂正を必要とする箇所が多くある。しかし、この文章で学習者が何を言いたいのかは、よく理解できるのではないだろうか。

内容については、試験の時に出题したため、良い点数をもらおうと、授業の良い点を書こうとしたのだろうと考えられる。が、授業の中でみんなで直すことにより、分からなかったことが分かったという意見は、とてもうれしい。

構成については、アウトラインでは本論の内容を2点にしていることから、2段落目を二つの段落に分けた方がよい。また、序論が結論の内容と重なることから、4月の時点での自分の日本語能力についてとか、最初の授業の感想など、話題を提起する内容に変える必要がある。

## 5. おわりに

平成9年度から、以上、述べてきた方法で作文の授業を行ってきた。平成11年度の後期試験での意見文によると、筆者の授業については、全員から肯定的な評価を得た。それは「毎週毎週の宿題が辛く、先生を恨んだこともあったが、1年経ったらそれほど多くの時間をかけずに作文がかけるようになった」という文にまとめられる。そして、多くの学習者(特にクラスの中レベル)が、「知らず知らずのうちに実力がついた」と感じている。日本語能力試験1級で300点以上得点していたある学習者(クラスではトップレベル)は、「他の学習者と自分の実力の差が縮んできた」と表現している。

具体的に良かった点としては「手紙の書き方がためになった」「他の授業で役に立った」「日本の社会のことがわかった」「質問がある時、自由に話ができることがいい」「日本の時事をよく知っているとほめられた」「作文を書く時、辞書で調べるので、漢字が多少でも書けるようになった」(非漢字圏学習者)などである。

その他、改善すべき点も指摘している。「宿題が多すぎる」「グラフについての表現をもっと勉強したい」「会話の勉強をしたい」「おもしろい話題をテーマにすべきだ」「毎回クラスの人々の作文を見るとだんだん自信がなくなった」。これらの意見は、今後の授業にぜひ参考にしていきたい。

授業への学習者参加を目指し、アウトラインを先に作ることによって意図を正しく伝える文章づくりを目指したこの作文の授業方法は、一部の学習者には無理がある。つまり、4月の段階で、学習者が書いた一つの文の意味が、読み手には理解できないレベル(そもそも、通常は大学入学レベルには達していない)では、最適な方法とはいえない。一つ一つの文があまりにも不正確で本人に確かめないと文の理解ができない。作文全体から言おうとしていることは想像の域をでない。このような学習者には、一文単位で正確に書く練習から始め、積み上げていかなければならない<sup>13)</sup>。平成11年度の授業では、19名中3名程度いたが、彼らの作文は、目に見えて上達したとはいえなかった。

しかし、クラスの中レベル(概ね日本語能力試験1級200点)以上の学習者には適していると思われる。学習者自身が自らの作文能力の上達を感じていた。そして、彼らが4月に書いていた作文と後期試験で書いた作文の差が、彼らの進歩を物語っている。

今後の課題は、作文の授業のさらなる活性化、つまり一人でも多くの学習者が積極的に授業に参加することを目指すこと、そして宿題が学習者に負担にならないようにテーマなどを工夫すること、である。

最後に、筆者のことを憎んだり、恨んだりしながらも、最後まで辛い宿題を出しつづけてくれた19名の学習者に感謝したい。



## 注

- 1) 「ゼミで発表する」ことも、外国人留学生が必要とする能力である。大学院レベルでの口頭発表については、拙稿「上級日本語学習者の口頭発表における問題点とその指導」『流通経済大学論集』Vol. 29、No. 4、1995.3) 参照。
- 2) 重松淳は「……留学生の場合「書く」は、実はそれ自体の能力を高める独自のプログラムのもとに進められるべき重みをもつのではないかと思われる」と述べ、「大学生活の四年間という長いスパンで完成していく思考の確立のミニチュア版を、一つのテーマを巡って「書いて表現しアピールすることを最終ゴールに据えて、日本語学習を展開するのである」とし、自らの指導プログラムを提案している。「留学生に対する『書く』ことの指導について」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学国際センター、No. 19、1990年。
- 3) 平川八尋は、学習者参加型の授業形態である、学生相互評価を導入した作文の授業を試みている。「学生相互評価を導入した小論文授業の試み」『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会、Vol. 4、No. 1、1997。
- 4) 4月開講時点での登録者は、28名いた。単位を取得しなかった9名の学生のうち、他大学等へ移った者は4名、年度途中で出席しなくなったのは前期2名、後期3名であった。
- 5) 平成11年度は、いわゆるハッピーマンデー法の施行のため、当初の予定より授業回数が減った。
- 6) 岡崎敏雄他編『ケース・スタディ 日本語教育』桜楓社、1992年、124ページ。
- 7) 小矢野哲夫は「作文指導は基本的に個人的な作業である。共通の話題について書くといっても、主題のとらえかたや展開のしかたは個人によって異なるものである。したがって、きめのこまかい個人指導が必要とされ、クラスの規模を制限することが重要である。最大限10人であろう」と述べている。「作文指導の実情と問題点—中級・上級の場合」『日本語教育』日本語教育学会、43号、36ページ。
- 8) 要約については、仙波純子「テキストの要約法について」『講座 日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター、30分冊、が参考になった。
- 9) 最新の新聞を用いることは、学習者が日本事情を理解する一助となる。また、新聞は広告を除き、原則として常用漢字が用いられている。大学レベルの学習者には少なくとも常用漢字は習得してほしいので、教材として適すと考えた。拙稿「漢字圏学習者への漢字指導—新聞を教材に用いての実践報告」『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会、Vol. 3、No. 2、1996。
- 10) 村上治子は作文の主題・文章構成について母国でのこれまでの教育で学んでいても、クラスで取り上げる必要性を述べている。「作文指導—授業計画とその実際」『講座 日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター、25分冊、98～99ページ。
- 11) 産能短期大学日本語教育研究室編『大学生の日本語』産能短大出版部、1990年、172～177ページ。
- 12) 佐藤政光他『実践 にほんごの作文』凡人社、1986年、48～49ページ。

- 13) 4月の開講時点で25名程度の登録者がいると、授業の焦点はクラスの中レベルに置かざるをえない。そのため、授業の進捗についていくことができない学習者——本来は、日本語の能力が大学入学レベルには到達していない——には、補講などの措置が必要であろう。また、留学生の日本語の授業を学部単位の授業ではなく、日本語能力によるクラス編成で行うことが必要であろうと考える。